

オープンサイエンスに係る評価専門調査会での論点

1. オープンサイエンスにおける評価・指標について

(1) オープンサイエンスに即した評価の在り方

研究DXは研究活動そのものを変革し、より付加価値の高い研究成果の創出を目指し、ひいては研究活動や社会の変革を促すものであるが、その効果を定量的に把握することには困難がある。基本計画のフォローアップのためにも、新たな評価手法の構築が求められており、どのような視点からアプローチするのが望ましいか（定性的な情報、社会的なインパクトの評価、ケースの収集など）。

(2) オープンサイエンスの進捗のモニタリング

オープンサイエンスの進捗については、各国におけるモニタリング方法が異なっており、国際的な比較が難しい状況にある。今後、G7諸国等においてオープンサイエンスについて国際協働を行っていくために、各国のオープンサイエンスに関する政策動向や市場動向を、どのような視点から把握・検討することが望ましいか。

2. 基本計画で取り上げられていない重要な事項（オープンアクセス）について

学術論文等のオープンアクセスについては、基本計画ではほとんど取り上げられていないが、G7等の国際動向を踏まえ、本年5月に開催されるG7科学技術大臣会合も視野に入れ、国として明確なオープンアクセスに関する方針を示すべく、CSTIにおいて昨年11月より検討を行っているところである。

国としてオープンアクセスに関する方針を明確にするに当たって、評価専門調査会として考慮すべき点は何か（特に、論文の査読システム、インパクト・ファクター等の定量的指標の影響等、オープンアクセスを推進する上で評価の在り方）。